連載105 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（66歳・内科）

寄せては返す波のように、
長い間、中断していた在宅患者さんが、
某施設に入居され、
当院がかかりつけ医として再会する。

最近の事です。突然、某施設の入居患者さんのかかりつけ医の依頼があったのです。その患者さんとは、約10年ぶりの再会でした。

昭和60年を過ぎ、平成の時代にさしかかったころの事です。その患者さん（女性）の当初の病状は、不安神経症、レイノー症状、不整脈、高血圧症でした。定期的に在宅医療の訪問診療・往診を行ったので、症状の悪化や廃用作用は、あまりみられませんでした。しかし、日本経済のバブルがはじけ終焉（しゅうえん）を迎えたころから、地方経済も疲弊（ひへい）したため、当院の在宅医療から費用のあまりかからない家族の通院介助による近医への受診となったのです。彼女は、独居状態でしたので、通院介助をしていた息子さんや娘さんも、月1回ぐらいの関わりしかなく、認知症の悪化に十分な対応ができませんでした。さらに、食欲不振、脱水症などの症状に気づくのが遅く、生命の危機となり、救急搬送となったのです。「症状が急性期を過ぎ、安定してきましたが、体力低下が著しく、廃用症状にて寝たきり状態でもあり、尿バルーン留置を要します。栄養失調も続いており、点滴静注補液の継続を希望されています。」これは、担当医である私たちが、施設入居時の彼女の病状に対する、当時の治療合同カンファレンスでした。

そして、長い間ご無沙汰していたその患者さんと、久しぶりのご対面となったのです。

「先生ですよ。覚えていますか。ずいぶん前のあなたの主治医ですよ・・・」

「・・・・・・、・・・・・・、本当に先生か・・・？」

「何か困ったことはない？」

「入院していた元の病院に帰りたい・・・」

彼女は即答しました。

「ここは大丈夫ですよ。私がいつでも、夜中でも往診に来るから安心してくださいね。最近は、これが普通なんですよ」

そう説明すると、彼女は、私の顔を不思議そうに、まじまじと見つめていました。その様子に、以前のおしゃべりで親しみやすい彼女のおもかげがかいま見えました。

「近いうちに、また訪問診療にくるからね」

と言って、その場を立ち去りました。

事務所にいた施設のスタッフに、日常の彼女について聞いてみると、せん妄症状なのか、頻回のコールを繰り返し、暴言、妄想がエスカレートしているとのことでした。

まず、本人の不安や不満に対して傾聴し、信頼感や親近感をもっていただけるよう努力することから始めようと心に決め、私は施設を後にしました。

私の知識からすると「未来空間で起こりうる出来事は、単なる偶然だけではなく、現実空間での“志”“意識”“思い”“行動”が、その結果を左右する場合がある」と、某脳神経学者は論じています。

今回のように、在宅医療の現場では、国策（厚生労働省）の介護医療政策もあいまって、再会するケースが時折あります。

いずれにしても、①量子力学でもみられる共鳴作用 ②ネゲントロピーとエントロピー ③介護医療政策と患者さん個人の生活療養スタイル（生き方、過ごし方）などが、微妙で複雑に絡み合っていると思われます。

未来から現在を見つめる視座は、今こそ、あらゆる場面での難題を解決する、大きなヒントとなりうるのでしょう。

外来診療（かかりつけ医） 要予約
総合内科・漢方診療科
お医者さんが来てくれる
24時間・365日体制で対応（松山市全域）
私たちは、質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 22名
（常勤8名、非常勤14名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 2名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！
Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/